

# 山に親しみ山に想う (13)

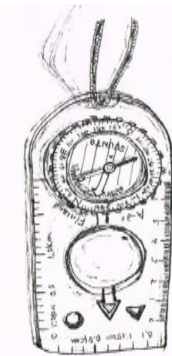
## — 濟州島の寄生火山 (2) —

<文・写真・絵> =岡本=

### 2. オルムを安全に歩く

韓国国土地理情報院地図には、オルムの登山道は殆ど示されていない。オルムは島内のいたるところに散在しているので、オルム周辺環境はそれぞれ千差万別である。遊歩道が整備されているもの、畑や牧場やゴルフ場の中にあるものは、安全なオルムである。しかし、1000m以上の標高で漢拏山の懐深く踏み込まなければならないもの、それ程標高が高なくても人跡路がなく、ルートを探しながら藪こぎしなければならないオルムもある。一口にオルムと言っても、丘を散策するようなものから、ルートファインディングを要する登山に類するものまで様々で、難易度の格差は大きい。

単身赴任の日本人がオルムで事故を起こすことになれば、世間の笑いものである。事故には、その類型から行方不明と怪我(滑落等)に大別されるが、怪我は危険な所を避けて迂回すれば防止できる。危険なルートは物ともせず、頂上に達することが目的ではない。体力を過信せず、変な勇気を出さず、危きに近寄らないことである。とすれば、残る行方不明対策である。要諦は、歩いて来た道を辿って確実に戻ることである。たとえオルムの頂上までいけなくとも戻ることが優先することである。

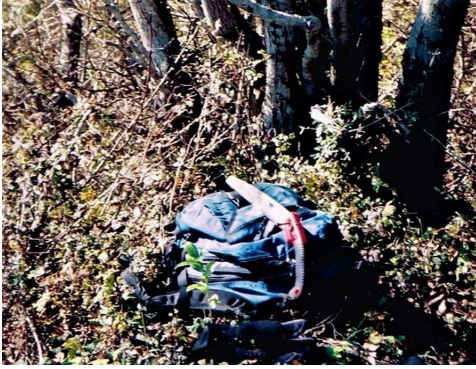


オルム探訪では「元に戻る」ことに最も神経を使った。低く、近くに集落を眺め得るところのオルムであれば、不安もそれほどではないが、漢拏山の懐深くにあって人跡路のはっきりしない所を歩く際に、始発点に戻れなければ、無限の樹海に迷い込むことになる。コンパスと韓国国土地理情報院地図を携行したのは勿論であるが、その他に周辺状況に応じて色々な手段を講じた。日本で登山は全くしていなかったし、ソウル在勤中に登った山は有名な山ばかりでルートは明白であった。濟州島でのオルム探訪は、未知の体験を含むものであった。

#### (1) 色リボン

ヤマケイの山学選書「マタギに学ぶ登山技術」には、「色リボンを所々の枝に結びつけておく。こうすると戻るときに道を発見しやすく便利である。」とある。至極当然のことを述べているが、では実際に、具体的にはどうするかが問題である。オルム探訪では、本当に色リボンを多用した。長さ40cm程の色リボンを20本~30本程持っていく(探訪途中で足らなくなると思われると、半分に切って本数を増やすこともあった)。リボンを結ぶのに若干の工夫をした。枝にリボンAを結ぶ。少し上ってAが見えなくなる直前の地点で枝にリボンBを結ぶ。リボンAとBの間隔は10mであったり、20mであったり、樹林相により当然変わる。BのリボンはAが見えなくなる直前の位置で結ぶが、経験上、日が陰ってきたりすると、リボンの色が判別しにくくなったりするし、風が出てきて枝が揺れだすと、見えにくくなる。時間の経過により天気が少し変わると、Aを探しづらくなる。そこで、Bリボンに、B地点を基点に北より東へ何度かの方向にリボンAがあると方角を記入する。こうすれば戻りの際に、確実に素早くAを確認できる。そんな面倒なことをしなくてもAは捜せるわけだからと言われればそうかもしれないが、不要な不安の瞬間をなくすることが無人の山中では重要であると思う。下りの際には、リボンを回収するが、進入路入口など要所と思われる地点のものは、他の人を惑わすことにならないように配慮しながら残した。

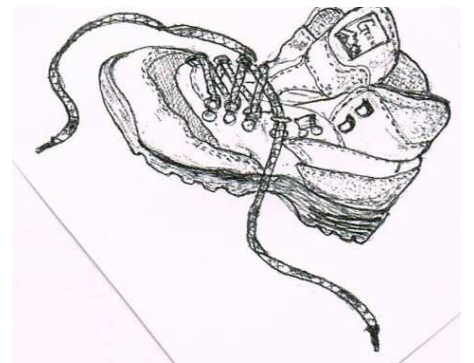
## (2) 鋸目



折り畳み式の鋸を携行した。樹林が密生し過ぎてリボンが有効でない際には、鋸目を刻んだ。その際は、鋸目の高さを目の高さに刻み、刻む場所は鋸目を見つけ易いように幹の北面とか南面とか一定方向の位置とした。

## (3) 靴跡

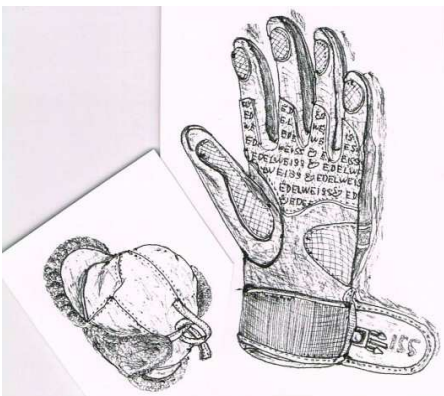
落ち葉の季節とか落ち葉が沢山積もっている場所で、かつ地面が少し湿っている場合、しかもリボンや鋸を使わなくてもよさそうな所では、登山靴で落ち葉を掻いて跡を付けながら歩いたこともある。乾いていたりして、掻き跡が消える虞がある場合には、この方法は避けた。



## (4) デジカメ

デジカメもよく使った。戻る下山の場合に見る景色や視界は、登る場合に見るものとは全く異なったりするものである。こんな所を登ってきたかと疑念を持つことさえある。下山途中の要所でこんな疑念を起こさないように、往路の途中で復路の際の視点にたつて要所を撮っておくことにした。不明瞭点の辺りや溪流の徒渉点や広い草地の横断点などでは、リボンは当然結ぶが、同時にデジカメに撮って確実を期した。

## (5) その他の歩き方



・ 濟州島にはノロ鹿が多く棲息していて獣道があるので、この獣道を利用した。

・ 濟州島には、茨の島と称してもよいほどに茨が繁茂している。人跡路でない所では、茨を鋸で払いながら登ることがある。服が傷むのは承知だが、体を守るために厚手の帽子を目深に被り、スキー用のゴーグルをメガネの上から付ける。左腕で鼻から口の辺りを覆って顔を護った。

・ 灌木が密生している所では、ザックを胸に抱えて、灌木の根元の空間を利用して匍匐前進したこともある。木は地

面から数十センチ位まで枝は生えていない。この方法は少し積雪がある所では、服も汚れず有効であった。

・ 濟州島は火山島なので何処に火山性の穴が開いているかわからないので、ストックは必需品である。オルムを目指して収穫済みの畑を歩く際も、足元に注意してストックを使った。

・ 一番安全な歩き方のための「装備」は、自分は山歩きを始めて間もない、特に登山について誰からも教わっていない素人だという心の持ち方、換言すれば「こわがり」でいることではないかと思っている。

(つづく)